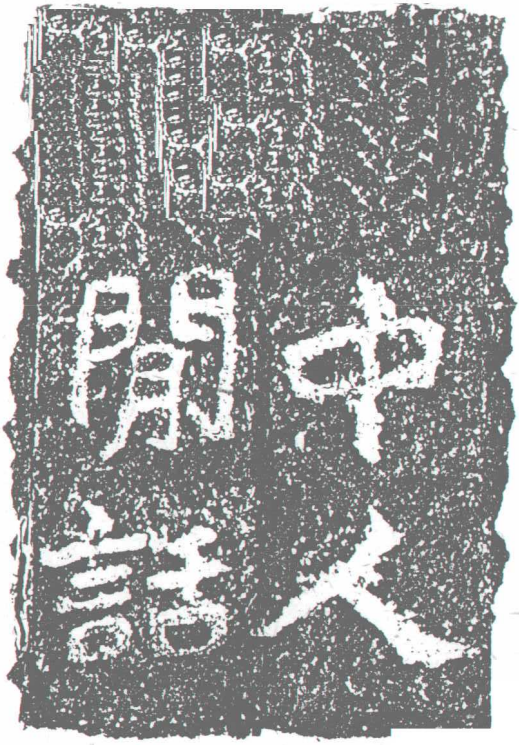
山中閑話

加藤周一



加藤周一

福武書店

山中人閒話

©1983 SHUICHI KATO　著者　加藤周一

1983年9月30日初版発行
1983年11月21日第2刷発行　定価1200円

発行者　福武哲彦

発行所　株式会社　福武書店

〒102 東京都千代田区麹町6-6
電話東京(03)230-2131(代)
振替口座　東京 2-87372

Printed in Japan　印刷／精興社・製本／小泉製本

ISBN4-8288-1098-6　C0095　¥1200E

1983

福武書店刊

目次

1980年

日米保守化のこと　11

原爆三十五年・日本とカナダ　16

ピカソ回顧　21

中立主義再考　26

二つの映画　32

1981年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

国際交流について　41
危機の言語学的解決について　47
空中読書または『ルーダンの悪魔』の事　53
桜に鶯・CARICATURA　59
軍国主義反対再び　65
教育雑談　71
民主主義のために　76
「フィンランド化」再考　82
福永武彦の『百花譜』　88
北米旅情　94
スタインバーグはいった……　101
「核の傘」の神話　107

1982年

『ニコラス・ニックルビ』観劇の事 115
教科書の検閲と「ユーフェミズム」 121
随筆についての随筆 127
「国際的責任」について 133
日本歴史の七不思議 138
訳詩偶感 144
遠い戦争 150
「なしくずし」という事 156
日本社会の七不思議 161
映画一つ・小説一つ 167
日本の伝統における空間と時間の概念 173

ゲオルク・ビュッヒナァ回顧 178
1983年 187
「驚くべき日本」について 193
英国からの便り 199
『加藤道夫全集一』読後 205
再び英国から 212
クロード・ロランと風景画
あとがき 219

裝幀　司修

山中人閒話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

'80

日米保守化のこと

7月

初夏の山中に郭公の声を聞きながら、私は過ぐる六月の選挙で自民党の大勝したことを考え、またそれより早く四月のアメリカで、多くの人々が秋の大統領選挙にレーガン氏が勝つかもしれないといっていたのを想い出した。秋の選挙の結果は、今から予想することができない。しかし選挙の結果がどうなろうと、十年まえのアメリカではレーガン大統領の可能性をまじめに問題にする人さえほとんどなかったのだから、政治的風土の変化はあきらかだろう。太平洋のこちら側でも、向こう側でも、たしかに保守化の傾向がめだつ。

なぜこういうことになったか。この疑問は、閑居して甚だ世事に疎い私の念頭にも去来する。保守化は、日米に限らない。西ヨーロッパ諸国にも同じ傾向がみえる。けだし先進資本主義社会に共通の現象には、共通の原因があるはずだろう（たとえば理想としての社

会主義体制の魅力の減退)。また相互の影響や超大国の圧力ということもあるにちがいない。しかしここでは、西ヨーロッパをしばらく措いて、話をアメリカと日本に限り、私の感想を述べたいと思う。私の感想は、さしあたり、日米の事情の共通面ではなく、同じ「保守」という言葉を用いても、事情の大いに異なる三点に係わる。

第一、「保守」の内容のちがい。

保守主義者が守ろうとするものは、政治的にも、文化的にも、伝統である。伝統は、近くにも、遠くにも、解釈することができる。建国二百年のアメリカで、近くは、ダレス氏以来の冷たい戦争と反共主義、遠くは、「建国の父祖たち」の政治的自由主義と経済的な自由市場の神話が、強い伝統であった。この個人主義的な社会では、保守主義者が、同時に、軍備拡大を主張して、経済的統制を退け、外国の内政に対する連邦政府の干渉を支持して、同じ政府の地方政治への介入に反対し、政治的意見の大枠(「コンセンサス」)の一致を強調して、個人の意見の多様性(「プルーラリズム」)を説くことができる。

他方、日本の伝統は、近くは、知る人ぞ知る、「一億一心」の軍国主義であり、遠くは、おそれおおくも「かんながらの道」であった。「建国の父祖たち」は、決して革命的自由主義者でも、反植民地帝国主義の闘士でもない。——ということは、アメリカ憲法と明治

憲法との対照にもあらわれている。ここで伝統へたち戻るということ、伝統を守るということは、軍国主義再建、経済的統制の強化、地方自治を犠牲にしての中央集権の徹底、政治的意見の大枠ではなく、そもそも政治的意見の統一へ向かわざるをえないだろう。太平洋の両岸では、「保守主義」という言葉の内容が大いにちがう。一方では、それが市民の権利とむすびつき得るが、他方では、その可能性がない。アメリカ製の「コンセンサス」という言葉を日本の保守主義者が歓迎して、「プルーラリズム」という言葉を歓迎しなかったのは、当然である。一方で流行する言葉が「新保守主義者」(the neoconservatives)で、他方で流行した言葉が「ニュー・ライト」すなわち「新右翼」であったのも、おそらく偶然ではなかろう。わが保守政党は、「新右翼」政党なのである。

第二、保守化の原因のちがい。

察するにアメリカの保守化は、国内的には、六〇年代後半の体制批判の運動(ヴィエトナム反戦、学生運動、「ヒッピーズ」)に対する反動として、また対外的には、最近までの対ソ緊張緩和政策(SALT)と第三地域の台頭(国連のアメリカ支配の終わり、産油国の原油値上げ)に対する反動として、おこったらしい。そのことは、三〇年代以来の対ソ協調と冷たい戦争との交代にもあきらかなように、アメリカの政府の振子運動を示唆する。

すなわち振り戻しの可能性が、将来に期待できないわけではないだろう。

日本の場合には、一九四五年以来、振子運動はなかった。そもそも四五年の非軍国主義化が、三〇年代の軍国主義に対する内発的な振り戻しではなく、敗戦と占領軍の強制にもとづく外発的なものである。四五年以後には、緩慢に、なしくずしに、坂を滑り落ちるように、保守化または右翼化が進行して、今日に至った。もちろんその過程に対する抵抗はあったし、今でもある。しかし「保革逆転」がおこらなかったように、その過程の方向が逆向きに変わることはなかった。今日の日本の保守化は、振子運動の一時期を示すのではなく、ゆるやかに、しかし止めどなく、滑り落ちる過程の一時期を示す。

第三、選手交代と変身。

アメリカは選手交代型の社会である。大統領も交代するが、世間の表面に出て発言する知識人の顔ぶれも交代する。今年の四月に、私が会ったアメリカの知識人のなかで、六八年に左翼自由主義者であった人々は、今もその立場を変えていなかった。他方、今日華々しく発言している「新保守主義者」たちも、六八年に別の立場をとっていたのではない（たとえばピーター・スタインフェルス『新保守主義者』、Peter Steinfels, *The Neo-conservatives*, Simon and Schuster, New York, 1979）。もちろん程度問題ではあるが、知

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com